

「幹部候補者の減少」が杞憂に終わることを願う

しまざき まさお
嶋崎 政男（東京都立川市立立川第一中学校校長）

キャリアシステムについては国会をはじめ大所高所から真摯な議論が展開され、国家公務員の早期退職、省庁割拠主義等の「負の面」が指摘された。私にはこれ以上に議論を深める力量も紙面もないが、採用時の幹部候補者の選抜の在り方及びキャリアシステムの最大の悪弊とされる「特権的意識」についての「1億総攻撃」的現象には、拙論を述べておきたい。



1点目の「採用時の幹部候補の選抜」については、採用後の業績評価の厳正化、幹部候補以外の者に対する再受験機会の付与、職務能力向上のための研修強化、の3点を条件に賛成である。

第一の理由は、「採用時1回限りの選抜」で、幹部職員としての資質・能力まで決定してしまうことへの批判は当然としても、採用時の選抜の重みは今後も確保しなければならないからである。

公正な選抜が行われている限り、その時点での「職務への適否や職務遂行能力」は正当に評価されるわけで、この段階での選抜を必要以上に軽視することは、国の発展に寄与しようとする若者の意欲を著しく削ぐおそれがある。

受験希望者の専門性の鈍磨、国家公務員としての自覚と矜持の減退、幹部職員を目指す意思の弱体化等を招く選考制度であってはならない。羹に懲りて膾を吹くような制度改革には反対である。「過ぎたるは及ばざるがごとし」。げに、名言である。

第二の理由は、30数年身を置いてきた教育界で見聞してきたことからの確信である。初任者研修や10年次研修等、研修制度の充実が図られるとともに、人事考課制度、教員免許更新制、指導力不足教員の認定等、人事管理システムも整えられ、教員の資質向上は着実に図られてきた。しかし一方、管理職候補者の人材育成という観点からは課題が多い。

スーパーティーチャーの育成、優秀教員表彰の制度化、教職大学院の創設、主幹教諭や指導教諭等の新設など、将来の管理職候補者を育成するための施策は矢継ぎ早に実施に移されているが、管理職不足に苦慮する自治体の存在は見逃せない。

教育界では、管理職候補の早期からの人材育成の必要性に迫られている現実がある。キャリアシステムの「負の面」を強調するあまり、国の将来を託す人材が国家公務員以外のフィールドに雪崩をうって流出してしまうことを憂える。

第二の論点は、キャリア職員がもつと言われる「特権的意識」についてである。

個人的な経験が基になっており、説得力に乏しいことを認めた上での発言であるが、私はこれまで接していただいたキャリアと称される方々に「特権的意識」を感じたことはなかった。したがって、正直な所、「特権的意識」がキャリアシステムの最大の「戦犯」とさ

れる背景が理解できない。

「そのような個人的レベルの問題ではなく、システムとしての問題なのだ」との反論はあろう。しかし、生涯一教師の平々凡々とした一国民としては、「特権的意識批判はやや感情的になりすぎてはいないか」というのが素直な感想である。

再び、教育界の話で恐縮であるが、教員のエリート意識について論じておきたい。

数年前から、教育委員会等に配属され、管下の教員の指導・助言等の役割を担う指導主事の任用制度が変わった。かつては、各教科等の「専門家」として、その道のスペシャリストぶりを存分に発揮していたが、今、その専門性は薄れ、事務的業務の拡大とともに、教員研修に携わる時間が大幅に増加した。

教員の人事異動や服務監督を主たる業務とする管理主事についても同様のことが言える。いずれも、制度改革に当たって話題となったのは、「専門職としてのエリート意識」であったと仄聞する。教育研究所の閉鎖やいわゆる「大物校長」の減少も同じ文脈から読み取ることができるといわれる。詳しい事情は分からぬが、「エリート意識」の弊害について真剣な論議があったことは十分想像できる。

閑話休題。

国家公務員制度改革基本法成立の際の附帯決議の一つに、「公務員が憲法第15条第2項に規定する全体の奉仕者であることを踏まえ、幹部候補育成課程の対象者に特権的意識を持たせるものとならないよう研修等において十分配慮しなければならないこと」とある。

資質・能力が伴わない「エリート意識」は無用である。「鼻もちならない特権意識」が憎悪の対象となることもやむをえない。しかし、真に職務遂行意欲に燃え、国政の一翼を担うという誇りをもつ若者を「幹部候補育成課程の対象者」になったからと、「杭」を打ってしまったのでは元も子もない。特権的意識を持つことのないよう「研修等において十分配慮」するに当たっては、十分配慮して欲しい。

「それにつけても」と思う。不平等な受験機会や不正な選考があるならば、人権問題として徹底的に糾明しなければならないが、なぜゆえ「特権的意識」がかくも重大視されるのだろうか。下衆の勘繰りとの誇りを覚悟の上で述べるならば、この議論には妬心が見え隠れする。『嫉妬の世界史』（山内昌之著、新潮社）の帯に「男の嫉妬は国をも滅ぼす」とある。「幹部候補者の減少」が杞憂に終わることを願う。